

美しい海を未来へ！

サンゴ保全活動に密着

愛南町の沿岸海域にはソフトコーラルやテーブルサンゴなど、多種多様なサンゴの群集が存在しています。また、サンゴを棲み処とする生き物も多く、生物の多様性を保持するのにも役立っています。

観光面や環境面で非常に重要なサンゴですが、近年、さまざまな要因で減少傾向にあり、海水温の上昇や海洋環境の変化のほか、サンゴを食べる巻貝やオニヒトデの被害が確認されています。そのため、サンゴを守るための保全活動が継続して行われています。



横島周辺の海中の様子（公益財団法人黒潮生物研究所提供）

サンゴの保全活動とは

サンゴの保全活動は、町や観光協会などで組織する宇和海中資源保護対策協議会（久保勇会長）が行っています。県や町などの補助を受け、年に15回程度、愛南町の沿岸海域でサンゴの天敵であるサンゴ食巻貝（シロレイシガイダマシ類）やオニヒトデを駆除します。



サンゴを食べるオニヒトデ
棘に強い毒があるため注意が必要です



サンゴ食巻貝（シロレイシガイダマシ類）
注意深く観察するとさまざまな種類があります



保全活動の一日に 密着！

9月5日(火)、協議会による今年最初のサンゴ保全活動が行われました。参加したのは地元ダイバー8名で、ダイビングショップから借り上げた船に乗り込み、西海の内泊港から横島周辺海域に向けて出港しました。

出航後、25分ほどで現場海域に到着すると、ダイバーは一斉に潜水準備を開始します。自ら持参したウェットスーツや酸素ボンベなどを身に付け、協議会が用意した駆除用の備品を確認します。

サンゴ食巻貝とオニヒトデではそれぞれ駆除方法が異なります。

す。巻貝は主にテーブルサンゴに付着しているため、ピンセットで一つずつ取り除きます。

一方、オニヒトデは希釈した酢酸を注射して駆除します。以前は捕獲したオニヒトデを全て陸揚げしていましたが、刺される危険性や陸揚げにかかる労力、処分の面などで課題が多くありました。

公益財団法人黒潮生物研究所（高知県大月町）などが行った調査研究で、オニヒトデに酢酸を注射すると4〜5日後にオニヒトデの活動が停止し、やがて死滅することが分かりました。協議会でもこの手法を取り入れ、効率よく安全に作業を行っています。



写真左からダイバーの吉田真一^{しんいち}さん、杉本寿^{とし}さん



横島周辺海域に到着



船上で入念に潜水準備を行います



準備が整えば海中へ



酢酸入りのボトルと注射器。1匹のオニヒトデに4〜8回ほど注射します



駆除用の備品一式



オニヒトデを陸揚げするダイバー。普段は注射による駆除が基本ですが、この日は報道取材があったため陸揚げしました。保全活動の周知も大切な仕事です



駆除して集めた巻貝はプレートへ



モニタリング用紙に記入する尾田^{かずひろ}さん。海中の様子を地図入りで記録します



帰航後、協議会の事務局職員が手作業で巻貝を数えて計測します



サンゴ食巻貝の駆除の様子。プレートの手前にサンゴに付着した貝が確認できます

潜水作業中に事故が起きないよう、ダイバーは二人一組で行動します。潜水している間、船主や協議会の事務局職員はダイバーの呼吸から生じる泡を追います。ベテランのダイバーであつても、海中の景観は変化が少ないため、方角を見失う可能性があるからです。作業海域から離れてしまわないよう、またダイバーに異変がないかを確認するために注視しています。

海中での作業を終えて港に戻ると、ダイバーの一人がモニタリング（観察・記録）を行います。サンゴの状態や海中の様子を記録し、今後の保全活動に役立てるため、平成27年度から取り入れました。



この日はサンゴ食巻貝を 348 個 (1.22kg)、オニヒトデを 20 匹 (陸揚げ 6 匹、注射 14 匹) 駆除しました。ダイバーによると以前はこの海域ではオニヒトデがあまり見られなかったそうです



横島周辺は美しい海が広がり、スキューバダイビングの人気スポットにもなっています

美しい海を 残していくために

サンゴの保全活動に15年ほど参加している吉本祐一ゆういちさんは、「オニヒトデや貝の駆除を継続して被害を少なくし、子どもたちにサンゴを残していきたい」と話しました。

船越でダイビングショップを

経営し、海中の状況に詳しい杉本寿としもとさんは横島周辺のサンゴの状態について、「以前と変わらず良い状態を保っている」と説明します。

保全活動の成果と これから

協議会ではこれまで、駆除した巻貝やオニヒトデの数量を成果指標としてきました。黒潮生物研究所の中地シュウなかつちさんは、「重要なのは駆除した数量の増減ではなく、サンゴが良い状態を保っていること」と言います。

保全活動を通じて、駆除作業と併行して海中の状況を観察し、サンゴに異変がないかを継続的に確認することで、何か変化があった際に迅速に対応ができるのです。

ダイバーの尾田一洋かずひろさんは、「数年前はびっしり貝があった場所でも、量が減ってきているところがある。サンゴが育ってきているのではないか」と話し、一定の成果を感じていました。

美しい海を未来に残していくために、これからもサンゴを守る保全活動が続けられます。

研究者の視点から

寄稿：公益財団法人黒潮生物研究所 所長 中地シュウなかつちさん

研究者も驚く愛南町のサンゴ

愛南町はサンゴ類の分布北限域にあたる重要な生息地であり、沖縄・奄美などのサンゴ礁域とは異なる特性を持った温帯域サンゴ群集が分布しています。研究者をうならせるような学術的価値の高いサンゴ群集が見られる場所もたくさんあります。

例えば、西海地区の横島東岸域には国内有数の規模を誇るソフトコーラル群集が見られます。付近の海底はウミトサカ類やヤギ類などで覆い尽くされており、異世界の森のような風景が広がっています。同じく西海地区の黒碇周辺にあるトゲトサカ類とナンヨウキサンゴの群生も見事です。近年では卓状ミドリイシ類の成育も良好でイシサンゴとソフトコーラルが饗宴する愛南の海らしい海中景観を見ることができます。

由良半島南岸の須ノ川海岸周辺には直径1メートルを超える大型の塊状サンゴからなるサンゴ群集があります。このようなサイズのサンゴは200歳を超える年齢のものもあるので非常に歴史の古いサンゴ群集といえます。

黒潮生物研究所では平成27年度に愛南町全域のサンゴ分布状況を調査しました（環境省委託）。近年のサンゴ食害生物の大発生の影響でサンゴの減少した範囲もありましたが、サンゴ群集の規模が維持されている場所や回復が見られる場所も確認されています。保全活動の効果を表したものだと思います。しかしながら、サンゴ食害生物の被害は今後も続き、新たな大発生やその他の攪乱も繰り返すことが予想されます。

愛南町の海にある計り知れない価値を持ったサンゴ群集、そして多くの人に驚きと発見を与えてくれる美しいサンゴの森を守り、育てていくためには、その価値を多くの人が理解し、保全に向けた努力を絶え間なく続けていく必要があります。

